



くすり博物館だより

㊦483 岐阜県羽島郡川島町・内藤記念くすり博物館・Phone: 058689-3111

第7号

厚生省推薦・優秀映画鑑賞会推薦

内藤記念くすり博物館開館10周年記念・エーザイ創業35周年記念

くすり日本人

16%カラー・42分

——古代から近代薬の黎明まで——



くすり博物館は、今年6月12日で開館10周年を迎えます。合わせて、博物館の創設母体であるエーザイも創業35周年を迎え、これを記念して、当館に収蔵する資料を始め、全国に点在する資料を通して、日本のくすりの歴史をわかりやすい映画にまとめました。

※

国内はもとより、わが国へのくすりの伝来を語る上で欠くことのできない中国にも取材して、くすり日本人の関わり合いの歴史を解説すると共に、くすりの歴史を通じて、日本の文化史の一側面を描こうとしたものです。

幸い、エーザイが日中国交回復以前から、北京医学院と学术交流を通じて親しい関係にもあり、この映画は、中国電影合作制片公司の同国撮影許可が得られた日本最初の映画となりました。

※

一般の方が見て楽しく、また専門的立場の方には学術的参考ともなるようにと、より良い資料を求めて、隈なく豊富に取材しました。

※

企画を開始したのが、昭和52年12月1日。構想を練りに練って撮影に入ったのは、翌53年7月1日でした。

それから約2年半、昭和55年12月1日に撮影は終了——、編成作業が始まって、今年3月20日、文部大臣列席の下、エーザイ本社での「内藤記念科学振興賞ならびに諸助成金贈呈式」の席上で、封切されることになりました。

1520フィートに及ぶフィルムには、とてもこの紙面では紹介し切れない程多くの人々や団体の厚い協力と好意が詰まっています。

くすり日本人 16%プリントを、学校、図書館、諸団体などに貸出しサービスいたします。ご希望の方は当館へお問合わせ下さい。

心に残るショットから

祇園祭・長刀鉾

南京中医学院学生による薬草採集
馬王堆出土の薬

神農像（湯島聖堂）

神農本草経集註（竜谷大学図書館）

玄奘三蔵ゆかりの大雁塔・興教寺

最澄の入唐牒（比叡山延暦寺）

陝西省博物館（中国・西安市）

鑑真和上像（唐招提寺）

鑑真のいた大明寺（中国・揚州市）

富山医科薬科大学・和漢薬研究所

江蘇省沙州県の薬草採集

天安門広場（北京市）

鉄砲伝来の地・種子島

深江記（平戸・松浦資料博物館）

幕末の外科手術道具（長崎）

森野旧薬園（奈良）

豊心丹製薬風景（奈良・西大寺）

和中散本舗（滋賀県栗太郡）

丸薬づくりの岩城老人（滑川市）

海や山をゆく薬売り（能登半島）

キハダの取入れ（徳島県祖谷村）

神農祭（大阪・道修町）

▶この映画は、故岡崎寛蔵先生（くすり博物館企画運営委員）の著書「くすりの歴史」を基に、制作されたものです。

監修 難波恒雄（富山医科薬科大学教授）

宗田 一（日本医史学会常任理事）

企画 内藤記念くすり博物館

内藤記念科学振興財団

エーザイ株式会社

制作 電通・電通映画社

製作 宇田頼弘

監督 浜田 徹

〈あらすじ — 進行に沿って〉

大昔の人々は、「病気は悪魔の仕業だ」と考えていました。魔除けの怪獣「白沢」を信仰し、旅に出る時は、白沢の絵を懐に入れて、お守りにしました。

京都の祇園祭りは、疫病退散を祈願したのが始まりです。厄除けのお守りは「ちまき」。草や木に病を治す力があることを、昔の人々は知っていたのでしょうか。

古事記には、すでに蒲の穂を薬に用いた話などが記されています。大国主命と因幡の白兔の物語です。

漢方の歴史をたどると、中国との交流の歴史が浮かびあがってきます。不老長寿の薬を求めて来日したといわれる徐福の物語は、古くからの関係を暗示したものです。

中国の医学と薬は、遣隋使や遣唐使によって、仏教と共に伝えられました。その中でも鑑真和上の来日は、文化、宗教のみならず、わが国の医学、薬学に大きな影響を与えました。

〈すりと日本人

老人は、とても75才とは思えない、しっかりした足取りで歩いた。猛烈な吹雪の中で、何度も何度も、くり返し歩いた。

映画の冒頭に登場する、吹雪のシーンの撮影。

老人の名は、西尾清作さん。今は引退しているが、かつて配置売薬に携わっていた。

撮影場所は、青森県、風合瀬海岸。西尾さんが、薬を売って歩いた場所である。我々が西尾さんを、この地で撮影することになった発端は、売薬に携わった古老の方々から、想い出話やら、体験談を伺ったことに始まった。その時西尾さんが、あまり

「東征伝」などに、当時の航海がいかに困難であったか、その模様が記録されています。鑑真がいた大明寺や、来日の出発点・揚州の古運河、船で下った揚子江などが映し出されます。その頃の薬は、正倉院に保存されています。

▼紙本着色東征伝



一方、1543年、種子島にポルトガル人が漂着。爾後、キリスト教と共に、西洋の医学、薬学が入ってきました。やがて鎖国に伴ない、往来は制限されましたが、長崎の出島を通じて、ケンペル、ツンベリーなど蘭館医の果たした役割は大きく、有名な医者としてはシーボルトがいます。

蘭学の波紋は大きく広がり、杉田玄白・前野良沢らは、翻訳書「解体新書」を著しました。

薬が一般に広まるのは、室町末期ですが、全国津々浦々に薬を運び、多くの命を救ったのは越中富山の薬売りです。足跡を物語る懸場帳ほか、多くの資料が当館に残っています。

また、薬草を採集して薬にする習慣も庶民の生活に根づいていました。いわゆる民間伝承薬ですが、今でも祖谷村(徳島県)で、そういった姿を見ることができました。江戸時代、薬は全国に普及したのです。

ペリーの黒船来航は、鎖国の眠りを覚ました。外国との往来によって、コレラなど新しい病気が入ってきます。と同時に、当時長崎に着任していたポンペによって、薬に対する新しい考え方が伝えられました。産業革命期の重要な柱であった化学と結びついた薬学です。

明治の先覚者は、先進国へ留学し、近代化学の思想と技術を身につけました。長井長義、北里柴三郎、高峰譲吉などです。わが国の近代薬学の黎明が訪れようとしていました。

撮影の一コマ

電通映画社 助監督 玉井 洋一

の吹雪のすごさに二度も死にかけた話を語った。その場所が、風合瀬海岸のあたりだった。鉄道がない時代だから、一軒一軒歩いてまわるわけである。猛吹雪のために一步も進めず、やっとの思いで人家にたどりついた時の話など、その時の模様を身ぶり手ぶりで語った。西尾さんの顔色と声は、とても若々しかった。皮膚の奥まで日焼けし切った顔は、ツヤツヤと輝いていた。50年間、休みなく勤勉に各地を歩き続けたことが、若さの秘訣なのだろうか……。

この時の強烈な印象が動機となって、再び西尾さんに、風合瀬海岸を訪ねてもらうことになった。そして、

かつてそうであったように、猛吹雪の中を歩いてほしいとお願いした。苛酷な条件だったが、西尾さんは快く応じてくれた。



▲西尾さん

さて、撮影はすんなりとはいかなかった。吹雪を期待したものの、この年はいつもより雪が少なく、なかなか降ってくれない。旅館で空模様を見ていて、降りそうになると海岸へ出かけていく。着いてからの方が大変である。西尾さんは衣裳を身に

まとい、我々はカメラをセットする。そして、猛吹雪がやって来るのを、じっと待つ。待っている間、横なぐりの寒風は、絶え間なく顔を突き刺す。そのうち寒さとか痛さの感覚がなくなってくる。我々は、ひたすら待ち続けた。

ちよつとお耳を——あんな話こんな話——



最後の仕上げに奮戦中の現場に乗り込んで、撮影スタッフから聞き出した、楽しい話、嬉しい話、胸がきゅんとなる話。

▶二度と還らぬ人に——

普段は公開してない鑑真和上像。森本長老と親交厚い石原明先生（横浜市大）の口添えで、なかなか見られない距離からカメラで迫ることができました。しかし先生は、この映像を見ることなく、昨年他界されてしまいました。

※

黙々と、しかも機械の如き正確さで製丸器を操る岩城老人もまた、完成を待たずして亡くられました。博物館に展示中の製丸器は、10年前、岩城老人によって、開館記念に操作実演されたことがあります。手の暖かさが残っているようです。

※

長井長義が使ったであろう顕微鏡は、東大薬学部にはっきりと、埃にまみれていました。「長井長義伝」の著者で高弟でもあった金尾清造氏の話挿入すべく、高齢を慮って冬の過ぎるのを待つ内に、亡くなってしまうのは残念です。

——もう二度と還らぬ、これらの人々の経験や知識が、生命となって

待つこと約1週間。やっと来た。西尾さんのバックにあるはずの荒れた日本海は、真っ白で、何も見えなくなった。白一色の中を、西尾さんは何度も何度もくり返し歩いた。その時、西尾さんはまるで自分の過去を背負って歩いているように見えた。

吹き込まれたフィルムとなりました。▶一方、明るい話題もあります。東大の顕微鏡もそうでしたが、取材によって、今まであまり顧られなかったものが再認識されることになったものに、「神農本草経集註」があります。16～7 mに及ぶ門外不出のこの巻物は、ボロボロで、破損の危険のためか開かれたことすらなく、この撮影に際して敢えて開いて下さった竜谷大学の好意に感激しました。今後の調査を簡便にするため、実物大に複製して寄贈しました。

▼「神農本草経集註」



▶めぐり合い

松浦家に残されていた「深江記」。これ迄、史的に注目されたことが無かったのでしょうか、新しい発見でした。

また、西安（長安）で耳にした遣唐使の入唐牒。中国にあったのは写して、廻り廻って日本で撮影できました。それが、比叡山延暦寺にあった最澄の入唐牒（国宝）です。

▶美しい日本人？

不老不死の薬を求めて、美童3000人を伴ない来日したといわれる徐福。今でも中国では大抵の人が知っている程、ポピュラーです。その3000人の子供達の子孫だから、日本人は美

歩んできた人生を、一步一步確かめるかのように、しっかりとした足取りで、一直線に我々の方へ向かってきた。

〔注〕西尾さんは、現在病氣加療中だと編集集中に知らされました。早くお元気になって下さい。

しいとも思われているそうです。新宮市（和歌山）には、その子孫だと信じている人々による「徐福会」があり、また徐福饅頭や徐福音頭などといったものもありました。

▶苦勞しました……

苦勞といえば、白沢の撮影です。東京からカメラを載せるクレーンを持ち込み、エレベーターの無い当館の6階まで、スタッフが分解してエッサエッサ運び上げました。

また特別出演もしました。白兔海岸での大国主命と白ウサギの出会いのシーンは、なかなか幻想的ですが、風格と貫録がおなかのあたりに滲み出た照明のト部さんが、実は扮しているのです。

▶多くの人に……

できるだけ沢山の方に見て頂きたいと、英語版と中国語版のフィルムも制作しました。

英名は Medicines and the Japanese—History of Medicine in Japan, 吹込みは、ラジオジャパンのアナウンサー、ケネス・K・丸本さん。また、吹雪の中を歩いてくれた西尾老人の声の吹替えは、NHKテレビ英会話Ⅲでおなじみの、ケン・マグドネルさんです。

一方、中国語の題は、「医药和日本人」。吹込みは宿玉堂〔株〕蘭々副社長さん。完成したフィルムは、北京医学院と中国電影合作制片公司にも寄贈されることになりました。

とぴっくす

▶中日ビルでくすり与健康展

解体新書、富山売薬資料、看板、製薬道具など当館の資料392点が出品され、3月2～31日まで中日ビル(名古屋市)で開かれています。同時に中日劇場では「喜劇・かえる屋——越中富山の萬金丹」を上演。出演の女優五大路子も来館し熱心に役づくりに励みました。以前にも杉村春子が「華岡青洲の妻」出演の際、見学に訪れています。なお6日、青木館長は中日文化センターで記念講演しました。同展は、中日新聞本社主催、くすり博物館・愛知県・名古屋市後援、愛知県薬剤師会・中日ビルタウン等の協賛です。 ▼五大路子



▶シンガポール "Modern Medicine and You Exhibition" に特別出品

昨秋、シンガポール国立美術博物館で開かれた同展には、らんびきや印箋など当館から27点の資料を貸出しました。これは京都で開かれたアジア薬学連合(FAPA)学術大会の際、くすり博物館の展示を見たシンガポール薬剤師会長 Poh氏が非常に感激し、当財団理事長に懇請、同国薬剤師協会設立75周年記念の特別展示として実現したものです。(10月31日から11月24日まで)



▲Pohシンガポール薬剤師会長(右端)の一行



◀開会あいさつの厚生大臣

また FAPA について詳細は前号で特集しましたが、同大会に出席し

ていた中国薬学会台湾省分会理事長の陳玉麟氏も、多くの図書を寄贈して下さいなど、同学術大会の後日談も華やかに続けました。

▼陳玉麟氏(右端)



▶図書カードの整備完了

多忙な業務の間を縫うようにしてコツコツと続けてきた図書カードの充実は、この程4年がかりの作業を終了しました。受入れ順カードの他に、書名・分類・著者名などで検索できます。

▶入館者15万人突破

ここ2～3年来館者が急増し(1日平均71人)、今年は21,850人。ちなみに10万人を越えたのは53年7月でした。

▶明治の医学展に顕微鏡貸出し

先頃、明治村に北里研究所本館・医学館が移築されましたが、その開館記念特別展に当館からライツ製顕微鏡など6点を特別出品しました。

新収蔵資料

* 栗原文庫

薬学者、特に民間薬の研究家として著名な故栗原愛塔氏の蔵書744冊が寿々夫人から寄贈されました。

栗原愛塔氏は1888年、川崎市で生まれ、東京薬学校(東京薬科大学の前身)卒業後、家業の薬局は弟に譲り、漢方・本草学を学び「東京本草会」を創設。戦時中は薬草の知識を全国的に普及。後、「薬草相談所」を作り、薬草療法を生涯の仕事とされました。

また薬学のみならず、老荘思想にも傾倒、さらに国粹主義的であったことから蔵書中にも、缺で切り開かないと見られないよう巧みに隠された思想書などあり、故人を偲ぶと

もに時局の厳しさ等思われます。「^{メリックンヘボン}米利堅平本先生常用方」などといった珍本もあり、当館の貴重な蔵書がまた増えました。

* 京都日下診療所旧蔵資料

祇園に程近い、どっしりした黒光りのする木造の同診療所が昨秋、取り壊されることになり、ご子孫の高橋博子氏(枚方市・医師)から産婦人科医療器具など196点が寄贈されました。

* 森田病院旧蔵資料

モダンな洋館建てだった同病院は戦争の被災も大禍なく残されたが一昨春取り壊しに当たり、福井良久氏(名古屋市・医師)から、医療器機357点、図書643冊が寄贈されました。特に雑誌「自然」等、創刊号から揃っていたので、製本、配架しま

した。

* 掛看板「大学目薬」など5点

同寸同形の桜材で、他に「龍角散」「中将湯」「実母散」「浅田飴」と揃い、5枚並べると壮観です。

小林晴生氏(長野市・医師)から寄贈されました。

* 掛看板「蘇人湯」

樺の一枚板に、流動感あふれる書体で美濃の名薬の名が書かれています。購入。

* 考眼堂蔵書

早崎孝則氏(愛知医大薬局長)夫人の実家に伝わる資料の整理のため蔵の調査に従事、1,156冊の図書目録を作成。医薬関係図書は無論、四書などの思想書、小学読本などの教育関係、源氏物語などの文学関係の充実した立派な蔵書でした。